

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	木野村 嘉則
最終学歴	学 位	専門分野
筑波大学大学院体育科学研究科 スポーツ科学専攻修了	修士 (体育学)	体育方法学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

真に信頼して事を任せうる人格の育成を中心として、人材育成を行う。

【目標】

スポーツを指導する立場となるための基礎知識を教授し、指導者としての態度を育成する。この際には、建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」が重要となること理解させる。特に専門演習に際しては、興味があるテーマを見つけ、論理的な問題解決を行えるように指導し、校訓の「真面目」にあるように真摯に取り組み結論まで想定した取り組みを行えるよう工夫する

【方針】

スポーツや体育の指導の実践的専門家の養成を念頭に置き、学生が責任を持った行動を行えるよう手法を配慮する。

【計画（方法）】

講義では、スポーツのコーチングやトレーニングに関する実践に関する事例を用いながら、学生が理論について具体的なイメージを持てるよう工夫する。今年度は、Teams を利用しながら、の授業となる。昨年度までの経験を基に、授業資料の展開、学生とのやり取りに活用したい。このことは演習でも同様である。

演習では、自ら考え情報収集し行動する資質を高めること促し、収集した情報から意見を作り上げた後に他者に伝えることに取り組む。

【担当科目】

（前期）

コーチング論、トレーニング科学、バイオメカニクス、基礎演習Ⅰ、人間健康学、専門演習Ⅲ

（後期）

スポーツ科学、基礎演習Ⅱ、専門スポーツ実習（陸上競技）、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

Teams を活用しながら、授業資料や課題の展開を行った。また、専門演習では共有ドライブを活用し、学生が主体となって研究を進めていくことをサポートした。この際、昨年度の学修状況を鑑みて、バイオメカニクスの講義にて教科書の購入を必須とし、教科書の活用方法を指示して学修を進めていくようにした。その結果、授業内容の理解度が増加した。なお、その取り組みを教材学研究にて報告した。トレーニング科学の講義についても、知識の定着の度合いが低いことを鑑みて、今年度の講義内に複数回のテストを配置したところ知識の定着度合いが増加した。

○作成した教科書・素材

人間健康学授業用教科書（「運動を測定し定量的に評価する」）

○自己評価

講義科目にて学生の学習時間を確保する取り組みが功を奏したと考えている。一方で、そうした取り組みをしていることが周囲に把握されなかったこともあってか、受講生の意欲を低下させる阻害要因の把握や対応ができなかった。

専門演習では地域と連携した授業・活動報告会にて2演題を発表し、1演題が入賞した。私の専門的な知識が及ばない領域であったが、学生の興味を基にした調査研究を遂行し形にすることができた。

自身の担当授業についての教育活動を考える際にも、学部などの全体のカリキュラムマップを考慮して目標に沿った内容に取り組むことに注力している。学部内などで全体の調整を図ることも重要となると考える。

II 研究活動

○研究課題

陸上競技の指導力向上に関するアクションリサーチ研究
体力トレーニングによるジャンプ技術習得に関する研究
サッカーにおける試合時の疾走要求と体力特性

○目標・計画

【目標】

1つ目の課題はデータを整理して論文作成を行う。2つ目の研究は2つ目および3つ目の研究は昨年度実施した調査データを分析するとともに、今年度もデータを収集する。

【計画】

○2016年4月から2024年3月の研究業績（特許等含む）

（著書）

- ・「運動を測定し定量的に評価する」第6章『人間健康学』西尾敦史，大勝志津穂，尚爾華 編。唯学書房，pp.100-116，2023.
- ・「指導者がもつ健康の運動指導上の位置づけ—高齢者と青少年対象の指導者の事例をとおして」第12章『長寿社会を生きる—地域の健康づくりをめざして』尚爾華，澤田節子，谷村祐子，肥田幸子，中野匡隆，木野村嘉則 編。唯学書房，pp.100-116，2017.

（学術論文）

- ・木野村嘉則，授業運営方法の改善が定期試験の正答率向上に及ぼす影響について：教科書を活用した復習を支援し理解度・満足度の向上を目指した授業実践。教材学研究 35pp.45-52,2024
- ・Saburo Nishimura, Yoshinori Kinomura. Kinematic characteristics of novices' sprint techniques at maximum velocity phase. Topics in Exercise Science and Kinesiology 5(1) pp. 1-22, 2023
- ・Nishimura Saburo, Kinomura Yoshinori, Oshima Yuji, Kataoka Haruhi, Iida Shuhei, Yokozawa Shohei. Influence of the step number of the approach run on the jumping kinematics in volleyball spike jumps. Topics in Exercise Science and Kinesiology 4(1) pp. 1-9, 2023
- ・木野村嘉則，小島正憲。保健体育教員養成課程における専門実技授業における受講生の学びの焦点についての調査：大学1年生を対象として。東邦学誌，vol.52(1), pp. 73-84, 2023.
- ・長谷川貴大，木野村嘉則，眞鍋芳明，木越清信，渡辺輝也。MCT-jump testにて評価されるパワー発揮特性のトレーニング男子大学生短距離走競技者を対象とした事例的検討—。陸上競技学会誌，23，pp33-44，2023.

- ・小嶋季輝, 上赤祐司, 小山雄三, 木野村嘉則. 中学校3年体育授業における多視点型教材「背面跳び」の効果検証. 体育学研究, 67, pp213-233, 2022.
- ・小嶋季輝, 上赤祐司, 小山雄三, 木野村嘉則. 人間による人間の研究, その方法と方法論: 単一の学習者現実の一般的調査方法の提案. 東邦学誌, vol.50(1), pp71-82, 2021.
- ・Kenta Hato and Yoshinori Kinomura. Ball speed and spin rate during repetitive pitching by baseball novices. Journal of Physical Education and Sport. 21 (supplement issue 3) ,pp. 2081-2086, 2021
- ・Masanori Kojima, Yoshinori Kinomura, Kenji Kuzuhara. Development of observational indicators for evaluating handstand posture in the mat exercise in physical education class: validity and reliability. Journal of Physical Education and Sport. 21 (supplement issue 3) ,pp. 2087-2096, 2021
- ・Yoshinori Kinomura, Saburo Nishimura, Haruhi Kataoka, Shuhei Iida. The influence of vertical jump ability on spike jump height with an approach run in female volleyball players. Serbian Journal of Sports Sciences. Vol. 12 (1) ,pp. 11- 16, 2021
- ・Saburo Nishimura, Tomoyo Miyazaki, Yoshinori Kinomura, Tomohiro Kizuka, Yoshinori Okade. Identifying an effective technique to improve the sprinting performance of male high school students who have a low sprinting ability. Journal of Physical Education and Sport. 20 (supplement issue 3) ,pp. 2021-2029, 2020, doi:10.7752/jpes.2020.s3273
- ・Saburo Nishimura, Yoshinori Kinomura, Yasuto Kobayashi, Rei Matsuzaki, Shoichi Matsushita, Nobuyuki Ikeda. Learning Outcomes for Physical Education in Long Jump: Is it Possible for 5th Graders to Learn Take-off Techniques that Enable Greater Vertical Velocity? International Journal of Sport and Health Science.vol.17, pp.A37-A53, 2019
- ・小嶋季輝, 上赤祐司, 小山雄三, 木野村嘉則. 「深い学び」の実現に向けた授業改善の方途の提案 : 中学校3年「走り高跳び」「背面跳び」の学習を事例として. 東邦学誌, vol.48, pp71-91, 2019.
- ・相川悠貴, 木野村嘉則, 兼安真弓. 2 型糖尿病モデルラットの糖代謝異常発現に対する田七人参摂取と運動の効果. 紀要, Vol. 66 , pp.1-8, 2018.
- ・木野村嘉則, 木下達生, 波戸謙太, 葛原憲治. 野球における二塁までのベースランニング時の走塁コースの分類に関する試案: 中学生及び高校生による自由走路疾走条件を事例として. 東邦学誌, Vol. 46 (2) pp.93-104, 2018.
- ・西村三郎, 木野村嘉則, 松崎鈴, 松下翔一, 池田延行. 小学校高学年児童を対象とした走り幅跳びにおける助走歩数が跳躍距離に与える影響. 国士舘大学体育研究所所報, Vol.36, pp.35-42, 2017
- ・西村三郎, 木野村嘉則, 小林育斗, 松崎鈴, 松下翔一, 池田延行. 小学校高学年児童を対象とした走り幅跳びの体育授業における学習成果の検討: より大きな鉛直速度を獲得できる踏切は学習可能か? 体育学研究, Vol. 62 (2) , pp.647-663, 2017.
- ・藤林献明, 木野村嘉則, 図子浩二. ジュニア男子アスリートを対象とした Rebound Long Jump Test と疾走及び水平跳躍能力との関係. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, Vol. 14, pp.105-114, 2017.
- ・古市直樹, 鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 教室環境における共同注視に関する共同分析による試論. 琉球大学教育学部紀要, Vol. 90, pp.9-26, 2017.
- ・鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 小学校道徳教育において育まれるケアの実際—理論的枠組みを用いて抽出・分析した2事例の比較検討を通して—. 未来教育研究所紀要, Vol. 4, pp.5-14, 2016.
- ・鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 小学校道徳教育における「ケアされる人」の発達動態—子どもの主観に着目した調査に基づいて—. 琉球大学教育学部紀要, Vol. 88, pp.257-266, 2016.
- ・古市直樹, 鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 教室場面における共同注意の分析方法に関する試論. 東邦学誌, Vol. 45, No.1, pp.29-47, 2016.

(学会発表)

- ・ 木野村嘉則, 西村三郎, 片岡悠妃, 飯田周平, 横沢翔平. 高く跳ぶための踏切動作は助走歩数によって変化するのか?—大学女子バレーボール選手における2歩および3歩助走によるスパイクジャンプの分析—. 日本コーチング学会第35回学会大会.p.57, 2024
- ・ 西村三郎, 木野村嘉則, 横沢翔平. 短時間で行われるスパイクジャンプの遂行能力と跳躍動作の関係. 日本コーチング学会第35回学会大会.p.57, 2024
- ・ 西村三郎, 木野村嘉則. 陸上競技短距離走における初心者と競技者の疾走動作の特徴—先行研究のレビューを通して—. 日本陸上競技学会第22回大会. P.34, 2024
- ・ Yoshinori Kinomura, Saburo Nishimura, Haruhi Kataoka, Shuhei Iida, Shohei Yokozawa. Analyzing the takeoff motion of female university volleyball players during spike jumping with a high approach speed. The 2023 International Conference for the 11th East Asian Alliance of Sport Pedagogy. 2023.
- ・ Yoshinori Kinomura, Saburo Nishimura, Matsuzaki Rei, Matsuhita Shoichi, Kataoka Haruhi, Iida Shuhei. Characteristics of jump ability in female volleyball players. The 2019 International Conference for the 8th East Asian Alliance of Sport Pedagogy. p.123, 2019.
- ・ Shoichi Matsushita, Yoshinori Kinomura, Saburo Nishimura, Haruka Kataoka, Rei Matsuzaki, Shuhei Iida. Characteristics of female volleyball players with high efficiency of arm swing and counter movement in the vertical jump. The 2019 International Conference for the 8th East Asian Alliance of Sport Pedagogy. p.122, 2019.
- ・ 熊野陽人, 下嶽進一郎, 木野村嘉則, 東中友哉, 松尾彰文. 走幅跳の助走において選手の感覚とデータは一致するのか?—各歩の助走速度と接地時間に着目して—. 日本陸上競技学会大会第17回大会, p.28, 2018
- ・ 木野村嘉則, 下嶽進一郎, 熊野陽人, 松尾大介, 越川一紀, 松尾彰文. プライオメトリクストレーニングにおける力発揮特性の経年変化～自己記録を向上させた選手の特徴～トレーニング科学, Vol.30(3), p.173, 2018
- ・ Yoshinori Kinomura, Natsuki Sado. Case study of the effect of high-intensity intermittent exercise on the distance traveled during high-speed running in a football game. 2018 KNSU International Conference – Asia-Pacific Conference on Coaching Science – Constructing a happy sport field of future generations. pp.76-77, 2018
- ・ Saburo Nishimura, Yoshinori Kinomura, Shoichi Matsushita, Rei Matsuzaki, Nobuyuki Ikeda. Influence of approach distance of long jump on jump characteristics of 5th graders. 2018 KNSU International Conference – Asia-Pacific Conference on Coaching Science – Constructing a happy sport field of future generations. pp.132-133, 2018
- ・ 小島正憲, 葛原憲治, 木野村嘉則. 初心者の倒立における評価指標の提案. 日本体育学会大会予稿集, Vol. 68, p.235, 2017.
- ・ 波戸謙太, 木野村嘉則. 野球初心者の全力投球からみたスピードトレーニングの適正反復投球数, 日本体育学会大会予稿集. Vol. 68, p.235, 2017.
- ・ 木野村嘉則, 波戸謙太. 全国高校野球選手権において無死1塁場面で用いられた攻撃戦術の分析, 日本体育学会大会予稿集. Vol. 68, p.235, 2017.

(特許)

(その他)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・令和 6 年度科学研究費助成事業基盤研究 C 申請—不採択
- ・令和 4 年度科学研究費助成事業基盤研究 C 申請—不採択
- ・令和 3 年度大学体育研究助成—採択
- ・平成 31 年度科学研究費助成事業若手研究申請—不採択
- ・平成 30 年度科学研究費助成事業若手研究申請—不採択
- ・平成 29 年度科学研究費助成事業若手研究申請—不採択
- ・平成 28 年度科学研究費助成事業若手 B 申請—不採択
- ・平成 27 年度笹川科学研究助成申請—不採択
- ・平成 27 年度大幸財団人文・社会科学系学術研究助成申請—不採択
- ・平成 26 年度科学研究費助成事業研究活動支援スタートアップ申請—採択

○所属学会

日本体育・スポーツ・健康学会，日本コーチング学会，日本トレーニング科学会，日本スポーツ教育学会，日本教材学会，日本体育科教育学会，日本スポーツパフォーマンス学会，日本バレーボール学会

○自己評価

事前に計画に挙げている研究テーマについての論文執筆が進まなかった。研究機材についても情報収集ができたので、次年度の論文文化を急ぎたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

所属委員会、大学および学内事業にて、情報の確認・把握をしっかりと行い役割を果たす。

【計画】

中高教職課程部会や、入試問題作成委員、学部 IRWG にて自身の役割を果たし、貢献する。

○学内委員等

中高教職部会、入試問題作成委員会、学部 IRWG

○自己評価

中高教職課程部会では、教職課程の運営に際して Teams などの活用を推進した。次年度にも引き続き、学生の支援を継続したい。入試問題作成委員として入試問題作成が円滑に進むよう業務遂行した。特に取りまとめの業務も行った。学部 IR の WG として、前年度に引き続いた調査を担当し、高い回答率での調査の実施を継続できた。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

研究成果を社会活動に活かす。クラブチームでの小学生へのサッカーの指導を継続する。この際には、子弟を教育するは天に事うる職分であると捉え、広く社会に報告できる取り組みを目指す。また、同様に事例対象者を中心として陸上競技者、陸上競技の指導者へのサポートを行う。

【計画】

学外授業にて高校生と接することがあれば、スポーツ科学分野に興味を持てるような授業を心が

け、進路選択の一助となるよう取り組む。スポーツの指導においてはサポートに際して、専門分野の知見の提供を求められているため、相手に伝わるように知見提供を行うとともに、実践上に現れる問題や課題について一緒に解決に向けて取り組んでいく。

○学会活動等

学術論文の投稿、学会大会での研究発表

○地域連携・社会貢献等

少年サッカークラブの指導、高校陸上部指導者へのサポート、高校での出張授業、小学生への学習教室の運営

○自己評価

社会貢献活動は自身の専門領域にて継続的に実施できている。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

今年度は、浅田学術奨励賞を受賞した（対象論文「中学校3年体育授業における多視点型教材「背面跳び」の効果検証」，日本体育・スポーツ・健康学会）

VI 総括

受賞論文については、対象論文の執筆に先立ち 2014 年の道德教育に関する研究にて人間科学の研究手法の確立を目指してスタートし、積み上げていくことで得られた成果となっている。その過程で研究者・教育者としての学びが多かった。今後もこうしたテーマも含めて取り組み、多くの研究者と共同し、切磋琢磨していきたい。

学内業務では、授業実践について省察して研究として報告したことで、自身の取り組みを見直す時間を確保するとともに社会への貢献を達成しようとした。また、学内委員会、WG、学部内運営に際して目的達成に必要な指摘や取り組みを遂行したと考えている。

以 上